

令和元年5月23日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2015～2018

課題番号：15H05196

研究課題名（和文）植民地主義の連鎖に関する調査研究

研究課題名（英文）Research on chains of colonialism

研究代表者

北村 嘉恵（Kitamura, Kae）

北海道大学・教育学研究院・准教授

研究者番号：20322779

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本における植民地主義の展開過程を比較史的な視野から再考することを目的として、19世紀以降のプロテスタント教会による台湾先住民族を対象とした教化活動に焦点を据えて、宣教師文書、外交文書、新聞記事等の英文資料の系統的な調査・分析を行った。これを通じて、もっぱら日本文資料に依拠した従来の分析枠組みを再考し、植民地主義の競合・連鎖を捉えるために不可欠な基礎資料の集積と共有化を進めることができた。さらに、個人所蔵の地域資料・家族資料の残存状況についても確かめることができた。これらを組み合わせることにより、植民地経験をより多面的に再構成することが可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

欧米ミッショナリー文書を中核とする英文資料を日本植民地史研究の重要資料として位置づけ、欧米や台湾の各地に散在する資料の集積とその共有化を進めることにより、近代日本の植民地経験を多面的に再構成する可能性が広がった。これは、継続する植民地主義の連鎖構造を解きほぐし克服していくという切実な現代的課題に対して、もっぱら日本文資料に依拠した従来の植民地理解を再考しつつ、さらに議論を深めていくための着実な基盤となる。

研究成果の概要（英文）： This research intends to rethink history of Japanese colonialism from a comparative perspective. For this purpose, this project conducts methodical investigation and analysis of historical records, which are relevant to Protestant missionary activities targeted at the indigenous peoples in Taiwan. This survey has enabled us to build a database which is decisive to reconstruct history of colonialism in East Asia from a global viewpoint. This study also succeeded in finding several personal records as family archives as well as regional archives. Utilizing such materials together, it becomes possible to reconstruct colonial experiences from a broader perspective.

研究分野：教育史

キーワード：先住民族 植民地主義 台湾 宣教師 アーカイブス

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

歴史的・社会的に周縁化された地点から帝国的秩序の形成・再編過程がいかに人々の行動や価値意識を規定してきたのかを解明する研究が、この四半世紀間に急速に進行してきた。とりわけ植民地主義研究、サバルタン研究、ジェンダー研究、エスニシティ研究など諸学問領域を通じて、国際共同研究のネットワーク化が進み領域横断的な議論が重ねられつつある。重要なのは、多角的な議論が進展するなかで、比較研究にまつわる困難さも顕わになってきたことである。安易な類型化や拙速な一般化がステレオタイプを再生産し、それが研究の停滞を招くだけでなく、現実の非対称的な関係性を追認する思考や言説へとつながることも稀ではない。この困難さを克服し比較研究の深化を図るためには、個別具体的な問題状況の実証的解明とともに、その連関構造を追究することが切実な課題となっている。本研究は、こうした課題追究の基礎となる資料と視座を提示することを目指して計画したものである。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本の植民地における教化活動の展開過程とその特徴を、同時代の植民地帝国間の競合・相互参照・協同の関係性に着目しながら、長期的かつ実証的に考察するための基盤形成を目的とした。具体的には、19世紀半ばから20世紀半ばに台湾島内で先住民に対する伝道・教育・医療活動を展開した英国長老教会およびカナダ長老教会の宣教師の活動に焦点を据えて、海外諸機関が所蔵するミッションナリー文書や個人文書、外交文書等の調査・収集・整理を集中的に行うこととした。さらに、これらの英文資料と、これまで集積してきた日・漢の文字資料、口述資料、写真記録等と相互批判的に吟味することにより、植民地帝国の諸実践の連関構造の解明に着手し、世界史的な視野から日本の植民地経験を捉え直すための基礎的な資料と視座を提供することを目指すこととした。

3. 研究の方法

本研究は、文献調査・聞き取り調査・資料分析・成果共有を相互に連動させ、下記の作業課題を中心に追究していくこととした。

(1) プロテスタント教会の東アジア宣教関連資料の所在調査・目録化

本研究は、19世紀半ばから20世紀半ばに台湾島内で活動した英国長老教会とカナダ長老教会の宣教師に着目し、台湾や北米、英国に散在する関係資料の調査・収集を系統的に行う。台湾先住民に關連する情報は、あるまとまりをもった史料群として整理・保管されているわけではないため、膨大なミッションナリー資料や外交・軍事文書、新聞記事等を通覧しながら断片的な関連資料を探し出すほかないが、むしろどのような文脈で論及の対象となるのかを確かめることも重要な課題となる。

(2) 台湾派遣宣教師のネットワークの解明

予備的調査を通じて作成した、19世紀後半～20世紀前半に台湾へ派遣された宣教師約150名のリストを手がかりとして、個人の経歴等に関するデータおよび関連文書の所在調査を進める。さらに、この作業を通じて得られた知見をふまえてミッションナリー文書の解読を進め、宣教団本部を拠点として東アジアと欧米の間を往来した人・モノ（カネ）・情報のネットワークを解明する。

(3) 台湾先住民の初等後教育の機会をめぐる諸相を解明

初等教育段階における就学・不就学に関するこれまでの実証研究の蓄積をもとに、本研究では、初等教育修了後の先住民の進学・学習の様態を解明する。その際、官立・私立学校のほか農業講習所や個人宅など多様な形態を視野に入れながら、さしあたり欧米宣教師による教化活動の解明に重点をおくこととする。これを通じて、先住民教化に関する〈宣教の実践・実績〉と〈統治の実践・実績〉をめぐる競合や協調を明らかにするとともに、そのはざままで新式教育へのアクセスをめぐる先住民の間にとどのような期待や困難があったのかを考察する。

4. 研究成果

○主な成果

本研究を通じて得られた主な成果としては、以下の点が挙げられる。

- (1) プロテスタント教会の東アジア宣教関連資料の所在調査は、トロント、イリノイ、台北を中心として北米、台湾、日本の各地域で実施し、それぞれ悉皆的な目録化の作業を進めた。個別の資料群のもつ奥行きとその特徴については現在進めている読解作業を早い時期にとりまとめて提示する予定であるが、この研究期間を通じて得られた重要な視点としては、アジアでの宣教活動情報の還流が同時代のカナダ社会においてもつ意味の大きさ、ならびに、アジアでの宣教活動の展開とカナダ国内での先住民に対する宣教活動の展開との連関である。前者については、宣教師文書、宣教師が持ち帰ったモノ、新聞記事などを並行して通覧したことにより確かめられた点であり、後者については、カナダ国内での先住民や移民

に対する宣教活動の位置づけの変化を視野に入れたことから浮かび上がった要素である。いずれも現在進行中の資料読解において重要な意味をもつとともに、今後の発展的な課題として位置づけうるものである。

- (2) 台湾派遣宣教師のネットワークについては、1927年に台湾へ派遣されたりリアン・ディクソン（1901-1983）を糸口として調査研究の進展をみた。とくに家族宛の書簡や写真など私的なつながりに重点を置きつつニュースレターや書籍などの印刷物をも渉猟し、目録作成と内容分析を進めつつある。ウィートン大学（イリノイ州）所蔵の原資料とカナダ長老教会文書館（トロント）所蔵の複写資料とは保管状態が異なり相互に欠落もあることから内容整理に時間を要したが、書簡約600通（1920年代～1950年代）の詳細な目録（発受信者、発信の日付、発信地、主な内容）を作成し終え、その分析に着手している。これらの分析を通じて、派遣地（淡水、台北）、故郷（サウスダコタ）、カナダ長老教会宣教団本部（トロント）、イングランド長老教会宣教団（台南、ロンドン）を往来した情報や人物が浮かび上がるとともに、台湾の宣教師宅に寄寓・来訪した先住民や夫ジェイムス・ディクソンの東台湾における先住民を対象とした伝道活動に関して公的記録とは異なる角度から解明が進む見通しである。
- (3) 台湾先住民の初等後教育の機会をめぐる様態については、北部タイヤル族出身のロシン・ワタン（1889-1954）の足跡に即して成果を論文としてとりまとめたうえで、国際的なセミナーで発表することができた。さらに、これまで未着手であった先住民女性の教育経験に重点を置いて調査を進め、国内外の学会・シンポジウムにおいて中間的な報告を行った。後者については、植民地期を通じた全体的動向の整理とともに、20世紀初頭に官立の国語学校附属女学校に進学した北部タイヤル族出身のヤユツ・ベリヤ（1885-1932）に関する基礎的事実の解明が進捗した。同時期に台湾北部のミッションスクールである淡水女学校に進学した先住民女性の存在も確認することができ、関連する諸動向（台湾総督府、台北在住宣教師、カナダ長老教会宣教団など）についても一定程度の調査の進捗をみたが、依然として未解明の点が多く残されている。ミッションスクール進学後の動向や個別ケース相互の連関を含めて今後に残された課題である。

○国内外における位置づけとインパクト

台湾社会では、2016年に政府代表として総統が先住民民族に向けた「お詫び」を表明したのを機として、先住民を主体とした歴史像再構築への社会的機運が高まりつつある。この中で、マジョリティ（漢民族）中心の歴史認識や偏見に満ちた先住民イメージを克服すべく、これまでなきものとされてきた歴史記憶の探究、その基盤となる歴史記録の収集が国家戦略の次元でも緊要な課題だと位置づけられている。この動きは、台湾社会内部の民主化・多元化に向けた実践のひとつであると同時に、国家と先住民との関係修復に取り組む国際的な潮流に連なるものでもあり、日本のアカデミズムに対しては植民地支配責任に関わる問題としていかに応答するのかという切実な問いを投げかけている。2017年に日本台湾学会が「転型正義」(transitional justice)を主題としたシンポジウムを開催したことも、このような動向の一つである。同シンポジウムにおける発題はもとより、本研究の取り組みそのものが、こうした東アジアにおける脱植民地化という現在進行形の課題への応答ともなるものである。

○今後の課題

本研究期間を通じて、植民地主義の歴史を世界史的な競合・連鎖という観点から捉え返すために不可欠な基礎資料の体系化と共有化の作業を進めることができた。これらは、もっぱら日本語資料に依拠した従来の研究枠組みを乗り越えていくうえで極めて有益な資料群であり、今後さらに踏み込んだ活用が期待できる。また、西欧ミッションナリーの東アジアにおける一方的なインパクトだけではなく、東アジアなかんづく台湾先住民に対する宣教活動をめぐる情報の還流が、宣教師を派遣した社会において有した政治的・文化的な重要性も鮮明になった。

同時に、ミッションナリー関連文書を通じて提示されるのが宣教活動の成果としての事象・表象であることの限定性もまた明瞭となった。宣教師の動向や宣教活動の概略についてはある程度継続的にたどることが可能である一方で、教化の対象となった先住民については個人名の特定制ら困難な場合が多く、個別に追跡しうる情報はごく限定的である。さらに、定型化した表象や言説が大陸を横断して長期にわたり流布しているといった特徴も浮き彫りとなった。これは植民地主義の連鎖という本研究の主題にも関わる重要な知見ではあるが、植民地社会や個々の先住民の経験を追究するうえでは克服していくべき方法論上の課題でもある。この点、打開の手がかりとなりうる個人資料や地域資料が残っていることも確認できており、本研究で蓄積した資料および知見をふまえて新たなアプローチで接近を試みることにしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

1. 北村嘉恵、「転型正義」/「転型不正義」からの問い(特集 シンポジウム 転型正義と台湾研究)、『日本台湾学会報』、査読有、第20号、2018年、30-37頁

2. 北村嘉恵、「台湾先住民族の歴史経験と植民地戦争——ロシン・ワタンにおける「待機」、『思想』、査読無、第1119号、2017年、24-45頁
3. 北村嘉恵、「〔書評〕山本和行『自由・平等・植民地性——台湾における植民地教育制度の形成』、『歴史学研究』、査読無、第959号、2017年、69-72頁

〔学会発表〕（計 4 件）

1. Kitamura, Kae, The Historical Experiences of Indigenous Peoples and the Colonial War in Taiwan, Questions of Indigeneity in the Asia-Pacific Speaker Series, Toronto: University of Toronto, November 3, 2017
2. 北村嘉恵、「「轉型（不）正義」からの問い」、日本台湾学会シンポジウム「轉型正義と台湾研究」、京都：京都大学、2017年5月27日
Questions from 'Transitional (In)justice,'
3. 北村嘉恵、「駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配——台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2016年）を読む」、台湾研究所ミニシンポジウム「帝国日本の台湾支配とキリスト教—韓国キリスト教史を相互参照の視座として」、東京：早稲田大学、2016年12月17日
4. 北村嘉恵、「植民地台湾における先住民の初等後教育——女性の進学とその前後」、教育史学会第60回大会、横浜：横浜国立大学、2016年10月2日

〔図書〕（計 2 件）

1. 藤原辰史編（北村嘉恵・第II章）、『歴史書の愉悅』、ナカニシヤ書店、2019年（印刷中）
2. 教育史学会編（北村嘉恵・第4章第1節）、『教育史研究の最前線II』、六花出版、2018年、320（105-111頁）

〔その他〕（計 2 件）

1. 〔翻訳〕呉豪人著（藤井康子・北村嘉恵訳）「大いなる幻影に抗して：台湾の市民社会による轉型正義への試み（特集 シンポジウム 轉型正義と台湾研究）」、『日本台湾学会報』、第20号、2018年、1-29頁
2. 〔新聞記事〕北村嘉恵、「〔特別企画 頼永祥長老史料庫〕豊富線索待深入探究」、『台湾教会公報』、3348期、2016年、15頁

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。